

闘争する社会——ルドヴィク・グンプロヴィチの社会学体系

小山 哲

一 「ファシズムへの予備工作」？

「グンプロヴィチは、ドイツ語圏においては、社会ダーウィニズムの典型的な、一派をなす代表者である」。ジェルジ・ルカーチは『理性の破壊』（一九五四年刊）のなかでグンプロヴィチをこのように位置づけ、その「似非自然科学的なアナロジー」にもとづく社会学理論によって「ファシズムの歴史観への重要な一つの予備工作が遂行された」と述べている（ルカーチ 一九六九、三四八―三五〇頁）。

ルドヴィク・グンプロヴィチは、オーストリアにおける社会学の創始者のひとりであり、その著書の多くは複

数の言語に翻訳され、同時代の欧米諸国や日本で広く読まれた。⁽²⁾しかし、今日の時点からみると、グンプロヴィチのテキストは、後世の論者が繰り返し参照し、たち帰るべき古典としての地位を確立したとはいいがたい。その理由のひとつは、ルカーチの評価にみられるように、グンプロヴィチが二〇世紀前半の人種理論の先駆者のひとりとみなされたことにあるといつてよいであろう。彼の代表作のひとつである『人種闘争』*Der Rassenkampf*（二八八三年刊）は、タイトルだけをみれば、容易に『わが闘争』*Mein Kampf* への連想を誘うものだ。「アウシユヴィッツ以後」の人文・社会科学の世界で、このような題名を冠した書物を著した人物に、ポジティブな意味で関心を寄せる者が多く現われなかったとしても不思議ではない。

しかし、先に引いたルカーチの単純明快な評価は、じつは問題の多いものである。じつさいにグンプロヴィチの生涯をたどり、彼の著書を読んでいくと、ルカーチの言明のひとつひとつに対する疑問がつきつきに湧いてくる。グンプロヴィチの言説と活動の意味を、「ドイツ語圏」という枠組みのなかでのみ捉えることは、はたして適切なのか。グンプロヴィチの社会理論は、社会ダーウイニズムの「典型」といえるのか。ダーウイン以後の自然認識は、どのような意味で彼の社会理論を規定していたのか。グンプロヴィチの「人種」観は、「ファシズムの歴史観」と、どの程度まで親和的なのか。

グンプロヴィチは、長らくオーストリアのグラーツ大学で教鞭をとり、多くの著書をドイツ語で出版したために、「ドイツ的」な学者と思われがちである。グンプロヴィチの著書『社会学概論』の英訳に序文を寄せているI・L・ホロヴィッツも、「専門用語の用法からみても、学問観からみても、グンプロヴィチは、ドイツ的な時代精神 (the Germanic Zeitgeist) の、互いに対立するさまざまな主張に完全にとらわれていた」と述べている [Horowitz 1963: 13]。しかし、グンプロヴィチは、じつさいにはクラクフに生まれたユダヤ系ポーランド人であり、グラーツに移住したのちにポーランドの知識人としての自覚を失うことはなかった。のちに触れるように、

クラクフでの学問的・職業的経験とポーランド人としての自己認識には、グンプロヴィチの社会理論の形成過程を理解するうえで重要な鍵がひそんでいる。

以下の考察は、グンプロヴィチの社会理論を、ドイツよりもむしろポーランドの知的文脈のなかに置きなおし、ポーランドにおける進化論の受容の一事例として位置づけることによって、彼の社会闘争論に、「ファシズムの歴史観」から遡及してとらえる視角とは異なる角度から光をあてようとする試みである。⁽³⁾ はじめに、舞台の背景となる一九世紀後半のポーランドの知的状況について、進化論の受容に焦点を合わせながら一瞥しておこう。

二 ポーランド・ポジティブイズムと進化論の受容

ダーウィンが『種の起原』を刊行した当時、ヨーロッパの地図のうえに独立国としてのポーランドは存在しなかった。⁽⁴⁾ この点は、進化論の受容史を考えるうえで、本書で取り上げられている他の諸国（イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、日本）の事例とは異なる条件のひとつである。独立の喪失という状況は、ポーランドの知識人による進化論の受けとめ方に、なんらかの影響をおよぼしたといえるであろうか。

マリア・ドンブロフスカの長編小説『夜と昼』（一九三二—三四年刊）に、一八八〇年代のロシア領ポーランドの地方都市に暮らすインテリ青年たちの世界を描いた箇所がある。彼らは、高等教育を受け、専門的な知識をもちながら、ロシア政府が禁じているために公的な場で活躍するチャンスがなく、もて余したエネルギーを仲間うちの議論のなかで発散していた。

彼らはいっしょにバツクルの『英国文明史』やハクスリーの『有機的自然における諸現象の原因』を読み、ダーウインの理論を議論し、シヨパンの革命エチュードや「蜂起」と呼ばれるプレリユード、ベートーヴェンの悲愴ソナタを弾き、ミツキエーヴィチのパラッドや「愛国主義的な」歌をうたい、「散歩したり、踊ったり」、植物の野外観察に出かけたりした。[Dąbrowska 1982: 14-15 ()内は筆者による要約]。

ドンプロフスカの描く鬱屈したポーランドの青年知識人たちの世界では、このようにシヨパンやミツキエーヴィチに代表される民族主義的な芸術と、バツクルやハクスリーのような西欧の新しい思潮とが一体となって教養の土台を構成しており、そのなかにダーウインの進化論も含まれている。

小説のようなフィクションではなく、もう少し現実に密着して書かれたテキストのなかにも、似たような記述がある。一八八〇年代に保守派のジャーナリスト、アントニ・ザレスキは、ワルシャワの青年たちの風潮について、次のように述べている。

若い世代は官の世界で仕える道をまったく塞がれ、実務や生活上の必要事を知る機会も持てずにいる。〔…〕若者たちはあまり勉強する機会も持てず、教師や改革者に食ってかかり、伝統や信仰や自分の祖国の生活条件から自分を引き離して、東欧をかき乱している過激な主張や、西欧の不道徳な考え方にすりよっている。〔…〕彼らは西欧の経済条件を知らず、しばしば初歩的な知識すら持ち合わせていないのに、いきなり準備もなしにマルクスやラッサールの社会学や経済学、ヘルマンやコントやリトレやビュヒナーの哲学、ダーウインやハクスリーやフォークトの自然科学、バツクルやドレイパーの歴史学などを学ぶことになる。彼らは、そこからくすねた、まだほとんど仮説の域を出ない程度の決まり文句で武装して、上の世代の人びとやら、旧世界やら、まだ傷がいえずに痛みに耐えている祖国やらに殴りかかり、その専断的で生かじりの

教義を振りかざして相手を引きずり回し、苦しみ、悩ませる。[Zaleski 1971: 406]

この時代の怒れる若者たちが知的に武装するための道具だてのなかには、このようにマルクスやコントと並んで、ダーウィンやハクスリーが含まれていたのである。こうした記述を統計的に裏付けることは難しいが、ひとつの手がかりとして一八九〇年代初頭のワルシャワ市内の図書館の貸出データを挙げておこう。表1は、フミエルナ通り三四番地にあった私設図書館で貸し出された図書のうち、文芸書と児童書以外の分野で貸出件数の多い著者をリストアップしたものである。進化論に関連する分野の翻訳書（マンテガッツァ、ダーウィン、スペンサー、ロンブローゾ、ハクスリー）が多く、また、自然科学・哲学書のなかではダーウィンの著書が比較的良好に貸し出されていたことがわかる[Kostecki 1986: 190, Tabela 4]。

彼らは、どのような思想的環境のもとで、これらの「教義」を学んだのであろうか。

一八八〇年代は、ポーランド思想史上「ポジティヴィズム (pozytywizm)」と呼ばれる思潮が支配的であった時期にあたる。⁽⁵⁾ 一九世紀のポーランド思想史にはいくつかの転換点があり、それらは民族解放運動の動向と密接に結びついていた。ポジティヴィズムの性格を考えるうえで重要なのは、一月蜂起（一八六三―六四年）の敗北である。一九世紀に相次いだ武装蜂起のなかでも最大規模のこの蜂起が敗北に終わったことにより、若い世代の知識人のあいだでは、それまで民族主義運動を支えてきたロマン主義的な哲学や思想に対する反動が生じた。「ポジティヴィスト」と呼ばれるこの新しい世代の論者たちは、非合法的な地下活動ではなく、合法的で日常的な活動を つうじて民族再生の道を探ることを主張し、「有機的労働 (praca organizna)」「土台における労働 (praca na dole)」など、労働倫理を尊重し、社会的に有益な経済活動を奨励するスローガンを掲げた。彼らはまた、教育水準の向上をはかり、西欧の進んだ科学技術を積極的に取り入れることで、ポーランド民族の潜在的な能力を

高めるべきであるとも主張した。その根底には、科学技術の発展が社会改良や民族再生につながるとする、進歩

表1 文芸書・児童書以外の分野で貸出件数の多い著述家

(1890-91年 ワルシャワ、フミェルナ通りの私設図書館の場合)

	著者	蔵書冊数	貸出件数	
			著者当りの件数	1冊当りの件数
自然科学・哲学	P. マンテガッツァ	3	72	24.0
	Ch. R. ダーウィン	6	58	9.7
	A. キュレル	2	41	20.5
	H. スペンサー	6	30	5.0
	J. W. ダヴィド	2	26	13.0
	C. フラマリオン	4	25	6.25
	C. ロンプローゾ	1	23	23
	A. シフィエントホスキ	3	23	7.7
	T. リボ	3	19	6.3
	T. H. ハクスリー	3	19	6.3
社会科学	P. フミェロフスキ	9	90	10.0
	A. J. ロール	4	83	20.75
	H. A. テーヌ	7	53	7.6
	W. スパソヴィチ	3	47	15.7
	G. プランデス	7	41	5.9
	J. S. ミル	4	32	8.0
	E. オジェシコーヴァ	3	31	10.3
	K. ヤロホフスキ	3	24	8.0
	H. ドレイパー	2	21	10.5
	A. バギンスキー	1	16	16.0
	T. B. マコーレー	2	16	8.0
	K. マルクス	2	16	8.0
	E. L. V. ラヴレイユ	2	15	7.5
地理	E. アミーキス	1	32	32

主義的で功利主義的な科学観があった。ポジティヴィズムの影響は、一八八〇年代以降、社会主義運動や新たな民族主義運動の台頭に直面することによって当初の楽観的な進歩への確信が揺らぎ、変質をきたしながらも、一八九〇年代まで持続する。⁽⁶⁾

ダーウインの著作のポーランド語への翻訳・紹介は、まさにこのような新しい思潮が支配的となる時期に行なわれた。ダーウインの影響がいちはやく及んだのは、ロシア支配下のポーランド王国領であった。現在のワルシヤワ大学の前身にあたるワルシヤワ中央学校 (Szkoła Główna Warszawska)⁽⁷⁾ は、一月蜂起が始まる前年にベネディクト・デイボフスキがダーウインの理論を紹介している。ベルリン留学中に『種の起原』に接したデイボフスキは、一八六二年にワルシヤワ中央学校の動物学講座に着任後、ただちにその内容を講義でとりあげた。これは、大学の講座で行なわれたダーウインの進化論の講義としては、イエナ大学におけるヘッケルの講義と並んで、世界的にもっとも早い事例のひとつである。のちに彼はこのときの状況を次のように回想している。

一八六二年、ワルシヤワで学問を学ぶ若者たちが火にかけた鍋のようにぐらぐらと沸き立っているときに、私は、創設されて間もないワルシヤワ中央学校で、動物学と比較解剖学の講義をはじめた。これらの研究分野は、一八五九年にチャールズ・ダーウインの名高い天才的著作が公刊されて以後、それまで予感さえされていなかった、新しい、きわめて重要な意義をもつようになった。私は、祖国で最初に進化論のさまざまな論点を説明し、この理論が人類の思想界にもたらした重要性を示す役割を果たすことになった。私はすでにそれ以前に幾度か、ポーランドの進歩的な若者たちの私的な会合で、進化論の主な原理を解説したことがあった。このため、私が進化論の支持者であり、それどころかダーウインの熱心な崇拜者であることは、世に知られるところとなっていた。 [Kuznicki 1987: 323 より引用]

一月蜂起の勃発後、デイボフスキは蜂起への関与を問われてシベリアに流刑されたが、ワルシャワ中央学校の講座はアウグスト・ヴジエシニョフスキによって引き継がれ、進化論の講義も継続して行なわれた[*Ibid.*: 324]。デイボフスキ自身は、刑期を終えたのち一八八四年にルヴフ大学の動物学講座に着任し、ここでも講義や大学外での啓蒙活動をつうじて進化論の普及に貢献した[*Brzek* 1982: 22-28]。

ダーウィンの著作のポーランド語への翻訳は、やや遅れて一八七〇年代に始まった。『種の起原』(原著一八五九年刊)は、ヴァツワフ・マイツェルによる部分訳が一八七三年、シモン・デイクステインとユゼフ・ヌスバウムによる全体の翻訳が一八八四年から翌年にかけて刊行されている。『人間の由来』(原著一八七一年刊)は、一八七四年から七六年にかけて、ルドヴィク・マスウォフスキによる翻訳が二卷三分冊のかたちで出版された。このうち原著の第一部にあたる『人間の由来について』は、ルドヴィク・ゲンプロヴィチが編集長をつとめるクラクワの出版社「故国」より刊行された[Kozłowska-Sabatowska 1978: 80]。ダーウィンの著作としてはさらに、『人間および動物の表情』のポーランド語訳が原著の刊行の翌年(一八七三年)に出版されたほか、一八八〇年代後半に『ビーグル号航海記』、『飼育動物および栽培植物の変異』、フランシス・ダーウィン編の自伝と書簡集が相次いで翻訳・刊行されている⁽¹¹⁾。

ちなみに現在、もつとも標準的なポーランド語によるダーウィンのテキストは、一九五九年から翌年にかけて刊行されたダーウィン選集(全八巻)⁽¹²⁾であるが、このうち『種の起原』は、デイクステインとヌスバウムによる訳文をほぼそのまま使用している。生存闘争(walka o byt)や自然選択(dobór naturalny)のような基本的な概念のポーランド語訳は、一九世紀末に作られた訳語が現在に至るまで通用していることになる。

ヤン・トムコフスキは、「ポーランドのポジティヴィズムは図書館のなかで生まれた」と指摘している[*Tomkow-*

ski 1993: 231)。この時期、ポジティブイストたちは、ダーウインに限らず、数多くの西欧の自然科学・社会科学書をポーランド語に翻訳して紹介している。まず、一八六〇年代から七〇年代にかけて、H・バックル、J・S・ミル、J・W・ドレイパーらの著書がポーランド語に訳され、多くの読者に迎えられた。H・スペンサーの翻訳は、やや遅れて一八八〇年代以降に相次いで公刊された。他方で、八〇年代には、マルクスをはじめとする社会主義関係の文献（『共産党宣言』一八八三年刊、『資本論』第一巻一八八四年刊）や、モーガンやタイラーの人類学の研究もポーランド語で刊行された[Markiewicz 1980: 419-421]。進化論の受容を論ずるさいには、ダーウインだけでなく、これらの文献がワン・セットになってポーランドの若い世代の教養を構成していた点に注意する必要がある。

翻訳とは別に、ダーウインやヘッケルの学説をポーランド語で紹介する書物や論文も数多く書かれた[Hochej-dowa and Skarga 1980: 42-51]。ただし、そのなかには進化論に批判的な立場から書かれた著作も多く含まれている。ダーウインの影響の高まりにとくに警戒心を強めたのは、カトリック教会であった。ステファン・パヴリツキ、ミハウ・ノヴォドゥヴォルスキらの神学者は、いずれもカトリック神学の立場からダーウインを批判した。また、医学者ヘンリク・ホイエルのように、ダーウインの学問的功績を評価しながらも、進化論から極端な唯物論や創造主の否定が導きだされることに警戒感を表明する論者もいた[Kuznicki 1987: 325-326]。ポーランド語によるダーウインの理論の紹介は、このように賛否それぞれの立場からなされる論争をつうじて行なわれたのである。

もつとも、当時の読書人がダーウインの理論をどこまで正確に理解していたのか、首をかしげなくなるケースもないわけではない。たとえば、一八六九年にオーストリア領ガリチアの都市ルヴフ（ドイツ名レンベルク、現在はウクライナ共和国のリヴィウ）で殺人犯の弁護にあたったある弁護士は、事件は被告がダーウインやコント

の著作を読み耽り、人間的な感情を失ったために起きたとして、減刑を求めている [Brzyk 1982: 21]。また、当時の新聞や回想録には、ダーウィンを読んで衝撃を受け「オランウータン博士」を自称して四つん這いで歩く哲学者青年や、ゴリラの雌と交わってどのような子供が生まれるか実験することを熱望する若者が登場する [Ibid.: 21-22]。ブライアン・ポーターは、ポーランド人の多くがダーウィンの著書を読んだことに示す証拠は少なく、「ダーウィン」の名はむしろ新しい思潮を表す一種のシンボルとして多用されたと指摘する [Porter 2000: 47-48]。いずれにせよ、このような表層的な受容も含めて、ダーウィンの影響が、学問的な次元を越えて一種の社会現象となっていたことは確かであろう。しかも、この影響は一過性のもではなく、数世代にわたって持続した。一八七八年生まれ思想家スタニスワフ・ブジョフスキは、『回想録』(一九二〇—二一年に執筆)のなかで、ギムナジウム時代を振り返ってこう記している。「まさしくこの年(一八九五年)、私はダーウィンにある程度通じるようになった。私は『種の起原』のなかから幾つかの章を読み、彼の立場が全体として拠つてたつ思想とその性格を理解した。〔……〕ダーウィン主義者 (darwinista) という呼び名は、われわれのあいだでは、仲間であるかどうかを示すカテゴリーとなった。この人はダーウィンの理論にどのような態度をとるだろうかと考えながら、われわれは人びとを分類したのである」 [Brzozowski 2000: 61]。

ポジティヴィズムは、西欧から輸入された知識や思想に多くを負っていたが、その当事者は、かならずしも自らを外来の文化のたんなる代弁者とみなしていたわけではなかった。ワルシャワにおけるポジティヴィズムを代表する著述家アレクサンデル・シフィエントホフスキは、ポジティヴィズムの土着的な性格について、また進化論とのかかわりについて、次のように述べている。

「若き雑誌」〔ポジティヴィストたちが依拠する一連の進歩的な雑誌を指す〕の闘士たちは、ポジティヴィズム

の文献に十分通じる前にポジティヴィストと名乗ったというので、非難された。それはじつさいその通りであったが、このことは彼らを貶めるものではなく、かえって名誉なことである。なぜならばそれは、この運動が自生的なものであること、この思潮が外国から流れ込んできたものでなく、この土地の、つまりポーランドの土壌のなかから湧き出してきたものであること、自然な発展の必然性のなかから生み出されたものであることを証明しているからである。「……」彼らはコントの信奉者というわけではなかった。「……」彼らの主な師となったのは、リール、ミル、スペンサー、ダーウイン、フォークトラである。「……」彼らは進化論者 (evolucionisti) を自称していた。この名称も、ポーランドのポジティヴィストに特有のものであった。[Tonkowski 1993: 22より引用]

ポジティヴィストが「ポーランドの土壌」から生まれた「進化論者」であるというシフィエントホフスキの認識は、以下で考察するグンプロヴィチの自己認識とも通じるものがある。

他方で、ワルシャワのポジティヴィストたちは、進化論の受容にさいして「生存闘争」を強調せず、また、「闘争」について語る場合においても、その形態が肉体的な実力行使による闘争から労働や知的活動による闘争へと「進歩 (Postęp)」する点を重視した。たとえばシフィエントホフスキは、労働こそが「生存闘争における主たる力」であり、「諸民族の運命を決定する」と主張する [Porter 2000: 58-74]¹⁴。この点は、「闘争」の暴力的本質を不変の社会法則として前面に押し出すグンプロヴィチの社会理論——とくに一八八〇年代以降の人種闘争論——とはニュアンスを異にする。

それでは、闘争の社会的意義を強調するグンプロヴィチの社会理論は、どのような「土壌」から生まれてきたのであろうか。次に彼の生涯をたどってみよう。

三 グンプロヴィチのプロフィール

ルドヴィク・グンプロヴィチは、一八三九年にクラクフで生まれた⁽¹⁵⁾。クラクフは、ウィーン会議後、「クラクフ共和国」と呼ばれる中立地域を形成していたが、一八四六年以降はオーストリア領ガリチアに編入された。ルドヴィクの父アブラハムはユダヤ系の商人であった⁽¹⁶⁾。

ルドヴィクが生まれた当時、ユダヤ系の住民は、一定額以上の納税者を除けば、クラクフの中心部に家を構えることはできなかった。このため、グンプロヴィチ家は、クラクフの南にあるカジミエシユに住んでいた。カジミエシユのユダヤ系人口比は高く、一八九〇年の統計では七六・三％に達している[Karolczak 1991: 252, Tabela 2]。しかし、アブラハムは経済的に成功して高額納税者となり、クラクフの中心部に家と店舗を購入した。一八五〇年代末に一家が移り住んだシルドミエシチェ地区では、ユダヤ人の人口比は八・五％に過ぎず、カトリックのポーランド系住民が多数を占めていた。

アブラハムは、市参事会員としてクラクフの市政にも発言権をもつユダヤ人社会の有力者であり、ドイツ語やフランス語の書籍を集めて私設の図書館を開設するなど啓蒙活動にも熱心であった。ユダヤ人同化推進論者であったアブラハムは、日常はユダヤの伝統的な服装ではなくヨーロッパ風の服を着ていたが、首都ウィーンに陳情に行くときにはポーランド民族衣装を身にまとったとこう[Bak 1960-61: 149]。ハプスブルク帝国内に居住するエスニック・マイノリティの民族意識の重層性を示すエピソードである(写真参照)。

父アブラハムが経済力によってユダヤ人社会をとりまく制約を部分的に乗り越えたのに対して、子ルドヴィク

はアカデミズムの世界で出自に伴う障壁を突破しようとした。しかし、その道程は平坦なものではなかった。ルドヴィクは、クラクフのヤギェウォ大学、次いでウィーン大学で法学を学んだ。卒業後は、ジャーナリストとして活動する一方、一八六二年にヤギェウォ大学で法学博士号を取得した。その翌年、一月蜂起が勃発する。ルド



ルドヴィクの妻フランチシュカ



ルドヴィク・グンプロヴィチ
(1863年、1月蜂起当時)



ポーランドの民族衣装を着た父アブラハム(右)と弟マクシミリアン・テオフィル



ルドヴィクと長男マクシミリアン
(のち中世史家)

[Bałaban 1991 : 672]

ヴィクと兄イグナツィも蜂起軍に加わり、市の中心部にあったグンプロヴィチ邸は負傷兵を収容する野戦病院と化した[Balaban 1991: 706]。ただし、ポーランド民族解放運動に対するルドヴィクの姿勢は、一定の批判的距離を置いたものであった。蜂起が起こる以前に友人に宛てて書かれた手紙のなかで、彼はカトリック的な民族運動に厳しい眼を向けている。カトリック主導のポーランド民族運動は、民衆の不満を宗教的デモンストレーションへと動員するばかりで、その結果、「とくに下層の人のびとにみられることだが、これを真に受けて礼拝のために仕事を離れ、狂信と愚考に陥る人たちがいる。誰ひとりとして働かず、熟考せず、分別をもって思考しない」(一八六一年一月一日付。Barycz [1963: 186-187]より引用)。民族主義運動の非合理的側面と日々の労働を軽視する傾向を批判するグンプロヴィチは、ポジテイヴィズムに近い発想を一月蜂起以前にすでに持っていたともいえるであろう。

一八六八年、ルドヴィクはヤギェウオ大学に教授資格論文を提出するが、「厳密性と公平性の欠如」を理由に却下された。二篇の提出論文のうち、とくにユダヤ人のポーランド法制史上の地位を考察した第二論文が、親カトリック的な審査委員の反発を招いたものと考えられる[Galla 1966: 55-56]。この論文は、ポーランドのユダヤ人問題にかんするグンプロヴィチの歴史認識と同時代認識を示すものとして注目に値する。グンプロヴィチは、一四世紀後半のポーランド国王カジミエシュ三世のユダヤ人政策を高く評価する。カジミエシュ三世は、ユダヤ人を「国民の他の諸階層に近づけ、ユダヤ人と国民をひとつの政治体へと融合させる」ことを意図していた。グンプロヴィチは、五〇〇年前に打ち出されたこの同化政策のなかに、同時代のユダヤ人問題を解決する方向性を見いだそうとする。他方で彼は、宗教的立場からユダヤ人を国民の他の諸階層から切り離そうとするカトリック教会の政策には否定的な評価をくだした[Gumplowicz 1867: 17-18, 26-27, 52-53]。

この立場は、一八七五年に刊行された『スタニスワフ・アウグストのポーランド・ユダヤ人改革案』でも維持

されている。一八世紀後半のユダヤ人問題をめぐる改革案を検討したうえで、グンプロヴィチは、同時代のガリチア社会を、いまだ「国民的段階 (narodowy stopień rozwoju)」に達しない「種族的段階 (szczeplowy stopień rozwoju)」にあるものと規定する。種族的段階の社会では、諸社会層が種族的・カースト的利害によって分断され、互いに対立している。ユダヤ人とポーランド人の対立も、このような種族的敵対にほかならない。したがって、ユダヤ人問題の解決のためには、このような分断を克服し、諸社会層が融合する国民的段階に移行しなければならぬ。この移行を促進する唯一の手段は、教育と啓蒙である。グンプロヴィチは、ユダヤ人の伝統をふまえた、ポーランド語による普通教育の実施と、教師の養成が急務であると主張する [Gumplowicz 1875: 59-63]。

ルドヴィク・グンプロヴィチは、基本的には父アブラハムと同じくユダヤ人同化論者であった [Zarembka-Piekara 1970: 31]。しかし、これらの一連の論考が示すように、彼の目指す「同化」とは、ユダヤ人が独自性を捨ててキリスト教社会に吸収されることではなく、ユダヤ人を含む諸社会集団が、それぞれの歴史的・文化的な固有性を維持しながら、より高次の「国民」に統合されることを意味していた。ユダヤ人問題をめぐるこれらの考察は、あらゆる社会現象を複数の異なる集団間の関係に還元するグンプロヴィチの社会理論の原点を示していると同時に、教育と啓蒙による国民形成の主張にみられるように、彼の社会観が出发点においてはポジティヴィズムの主流に近い社会進化の展望をもっていたことをも証言している。

クラクフのアカデミズムの世界から締め出されたグンプロヴィチは、一八六九年に創刊された雑誌『故国』[Kraj]の編集者となった。⁽¹⁸⁾『故国』は、保守的なガリチアの言論界にあつてポジティヴィズムの思潮を代表する雑誌であり、「有機的労働」の主張を支持し、カトリック教会と国家の分離、教育の世俗化、ユダヤ人の同化推進を唱えた [Markiewicz 1980: 73-75; Zarembka-Piekara 1970: 17, 19-20, 22-31]。『故国』の周囲に集まった知識人は、『人間の由来』をポーランド語に訳したマスウォフスキをはじめとして、進化論の紹介・普及にも熱心であった

[Kozłowska-Sabatowska 1978: 74-83]。初等教育の義務化や女子教育の拡充の要求など、民族自立の基盤として教育・啓蒙の役割を重視する『故国』の論調は、ユダヤ人問題をめぐるグンプロヴィチの主張とも一致していた[Zaremba-Piekara 1970: 26-29]。しかし、この雑誌は、カトリック教会や保守派の論客が強い影響力をもつクラブでは生き延びることができず、出版活動はわずか五年で破綻した。

『故国』廃刊の翌年、グンプロヴィチはクラクフを去り、グラーツに移住した。翌七六年、グンプロヴィチはグラーツ大学で教授資格を取得し、以後、同大学で教鞭をとるかたわら、主にドイツ語で多くの著書を著した。グンプロヴィチは法学の講義を担当すると同時に社会学の研究も進めたため、著作も二つの系列に分かれるが、ここでは社会学の系列に限定してみておくことにしよう。

グンプロヴィチの社会理論にとって重要な「人種」概念は、グラーツへの移住直後に刊行された『人種と国家』（一八七五年刊）のなかではじめて提起された。人種闘争論の着想は『人種闘争』（一八八三年刊）のなかで具体的に展開され、翌八四年に刊行された『社会学概論』において独自の社会学の体系のなかに組み込まれた。この二著によって、グンプロヴィチの社会学理論の枠組みはほぼ完成したとみることができる。その内容は、『社会学体系』（一八八七年刊）として、ポーランド語でも刊行された。その後も、『社会学と政治』（一八九二年刊）、『社会学的国家理念』（一八九二年刊）、『社会学のエッセイ』（一八九九年刊）、『社会学要論』（一九一〇年刊）など多数の著書があり、その多くがドイツ語以外の言語にも翻訳されている⁽¹⁹⁾。

グラーツに移住後、グンプロヴィチはキリスト教（プロテスタント）に改宗した。大学に職をえたグンプロヴィチの生活は表面的には平穏なものであったが、その晩年は明るいものではなかった。一八九七年、中世史家として将来を嘱望されていた長男マクシミリアンが、失恋の痛手から自殺する。その後、長らく眼を患っていた夫人が失明し、自らも舌癌に苦しんだグンプロヴィチは、一九〇九年、夫人と共に青酸カリを飲んで世を去った。

この自殺は冷静に準備されたもので、グンプロヴィチはあらかじめ友人たちに別れの手紙を書き送り、毒を飲むまえに警察に届けを出している[Gella 1966: 61-62]。この、ある意味で醒めた最期の迎え方は、次に検討するグンプロヴィチの社会理論の根底にある世界観とも無関係ではないように思われる。

四 グンプロヴィチの社会学体系——進化論との関連を中心に

グンプロヴィチの社会学理論は網羅的な体系として構築されており、そのすべての論点をここで取り上げることはできない。以下では、主としてポーランド語で書かれた『社会学体系』（二八八七年刊）に拠りながら、進化論に関連する論点に絞ってみていくことにしよう。

独自の自然過程としての社会過程

グンプロヴィチの社会学は、人類史を自然法則のもとに包摂する一元論的な立場を前提としている。彼は、従来の人類史に対する見方を、次の三つに整理する。(一)人間の歴史は神の摂理によるという有神論的な見方。(二)理性と自由意志によって人類が進歩してきたという合理主義的・自由意志的な見方。(三)人類史は自然過程の一部であり、人間の理性や自由意志が人間の運命を決定するのではなく、自然法則が歴史を規定しているという自然主義的な見方。グンプロヴィチ自身は(一)・(二)を退け、(三)の立場をとる。したがって、ヘーゲル流の歴史哲学は厳しく批判される[Gumplowicz 1887: 26-39]。

一元論の立場にたつと社会過程もまた一種の自然過程とみなされるが、グンプロヴィチは、「独自の自然過程

としての社会過程 (proces społeczny jako proces naturalny sui generis)」という考え方を導入し、社会過程を物理的領域や心理的領域における変化に還元することには異議を唱えた。「一方で、われわれは、人類史と各社会の発展は自然過程として生起するとする社会学者たちの見解を全面的に受け入れる。しかし他方で、われわれはこの社会過程を、これまで設定されてきた自然的諸過程の階級のいずれかのもとに引き入れることには同意できない。[……] 社会過程は独自の自然過程であり、それは、上述の自然的諸過程のいずれとも同一視するべきではない」[Ibid. : 142]。つまり、社会法則はそのまま自然法則なのであり、それをさらにメタ・レヴェルの事象に還元する必要はないのである。

社会学の対象となる社会的現象 (zjawisko społeczne) は、次のように定義される。われわれを取り巻く世界の諸現象は、物理的現象 (生物学的現象、生理学的現象を含む)、心理的現象 (本質的に個人的現象とみなされる)、社会的現象の三つに区分される。このうち、社会的現象とは、「人間の諸集団や諸集合の相互作用として生じる人びとや人間集団のあいだの関係」を指す。したがって、社会的現象の単位は、種族にはじまり国家や民族にいたる集団であり、個人は社会的次元では第一義的なものではない。これらの集団のなかから生みだされる言語や慣習や道徳や法律は、社会精神的現象 (zjawisko społeczno-duchowe) と呼ばれる[Ibid. : 130 - 131, 202 - 203]。

グンプロヴィチの考える社会的世界においては、個人ではなく、社会的諸集団が運動の主体であり、また闘争の主体である。「社会生活の内容は、諸社会集団の作用と反作用に尽きている」[Ibid. : 435]。人間の思考の源泉もまた、個々の人間のなかにあるのではなく、彼が属する社会集団のなかにある。「個人が思考するのではなく、彼が属する社会のみが思考するのである」[Ibid. : 436]。個人の行動の規範も社会集団の行動に規定されており、個人の幸福は、彼が属している社会集団の幸福と成功に従属している[Ibid. : 391, 458]。グンプロヴィチによれば、個々人の自己保存の衝動でさえ、はじめからつねに社会的な衝動である。「人間はその本性からして、利己的存

在でも利他的存在でもなく、社会的存在である。すなわち、人間は、社会的利己性を有している」[Ibid.: 432]。

ここから、社会発展の動因もまた、個人的な利己性や利他性ではなく、社会的利己性、つまり自分が属する社会集団の利益において行動する本性に求められる。「キリスト教の教えでいうところの、あの普遍的な意味での「隣人愛」や人類への共感とは、決して人間の行動の動因にはならない。そうではなく、人間の行動を引き起こすのは社会的共感 (sympatya społeczna)」、つまり自分の属する集団への個人の結びつきである。この共感とは、自分の属する集団の外に及ぶことはない。「血や性格や思考様式の絆によってなんらかの社会集団と結びついてい

いる人間は、いわば群れの利己性を持つ。彼の共感とは、通常の状態では、特定の集団の枠の外に及ぶことはない」。ゲンプロヴィチは、社会的利己性と社会的共感が一体となったものを、共生性 (syngenizm)、あるいは兄弟感情 (uczucie pobratelstwa) と呼ぶ[Ibid.: 432 - 433]。

人類の多民族起源論

ゲンプロヴィチによれば、自然法則の本質は、「つねにいたるところで異質な諸要素が相互に影響しあうこと」にある[Ibid.: 143]。この本質を社会的現象の世界で追求し、定式化したものが、社会闘争論である。社会過程のなかで「相互に影響しあう異質な諸要素」とは、諸社会集団を指す。社会的発展が生じるためには複数の社会集団が存在し、それらがどこかで出会わなければならない。

この発展〔社会的発展〕を自然過程として学術的に扱おうとするならば、人類を現実にあるがままに、つまり、民族なり、種族なり、ホルドなり、群れなりの、無数の多様な社会集団の総体とみなさなければならぬ。これらのさまざまな集団は、互いに会合する場所ではどこでも互いに影響を及ぼしあう。[Ibid.: 144]

ここから、社会闘争論のもうひとつの重要な前提として、人類の多民族起源が主張される。

もしわれわれが、人類は最初から多様な民族的諸要素が多数集まったものとして存在した、ということを受けられることができるならば、自然過程としての社会過程についても語りうることになる。[*Ibid.* : 145]

最初に単一の集団しか存在しないようでは「異質な諸要素による相互作用」は起こりえず、社会過程も起動できない。変化が生じるためには、最初から複数の異質な諸要素が存在しなければならぬ。したがって、人類は最初から複数の集団に分かれていたと考えるのである。

グンプロヴィチによれば、「自然の政治 (politika natury)」においては「多数から少数へ」が原則である。たとえば生物の世界では、はじめに無数の胚が存在し、そのうち生物の個体になるのはごく少数で、さらにそのうちの少数が成熟した体制を獲得する。「これが自然の永遠の傾向である」。この「自然の政治に照らしてみると、人類が一組の、あるいはせいぜい数組の起源となるペアから生じたなどということ想像できるだろうか」[*Ibid.* : 145 - 146]。

グンプロヴィチは、多民族起源論がダーウィンの理論と矛盾しないことを力説する。

私は、人類の多民族性がダーウィンの理論と矛盾しないこと、それどころか多民族性はこの理論の精神と完全に合致しており、この理論に対する表面的な理解のみが誤解の原因となりえたと私が確信していることを示したい。ダーウィニズムは、適応と遺伝による変異の説明にあまりにとらわれていたので、多民族性の問題を詳しくとりあつかう機会を持たないままにきたのである。[「……」]

[「単一起源論は、」原初的細胞が最初に発生するときには、たった一個のそのような細胞が生成したのであ

り、そこから、続く何百億世紀のあいだ、不断の変化のなかで、つねにごく少数の子孫のみが発生し、そこから最後にたった一組ないし数組の原初的人類のペアが成立した、ということ仮定しなければならない。

このような滑稽な想像は、ダーウインの理論の精神にまったく反するものである。ダーウイン自身、このような推測には何度も警告を発しているし、自分の言明は「原初的諸形態」(pierwotne formy)〔複数形〕にかんするものであると繰り返し述べている。「……」彼にとっては、何よりもまず、種の変化の過程が起りうることを示すことが問題であった。彼のすべての証明や議論は、この一点に向けられている。[Ibid.: 174]

— 1751

つまり、グンプロヴィチの理解にしたがえば、生存闘争や性選択は、いずれもすでに存在する種が変化する仕組みを説明するための概念であり、ダーウインはすでに存在する種が分岐していくメカニズムを証明することに力を集中していたために、その種が起源において多数存在したかどうかを突き詰めて問うことはしなかったのである。

しかし、少なくともダーウインは、多起源論を明確に否定はしなかった。これに対して、単一の起源から発する進化の系統樹を描いたヘッケルは、ダーウイン理論の本来の趣旨から逸脱しているとして批判される。

ダーウインが示したように、遺伝と適応、性をつうじての自然選択 (naturalny dobor plicowy) と生存闘争は種の変異において大きな役割を演ずる。しかし、ヘッケルは、種の差異の原因としてそれ以外のいかなるものも認めようとせず、いっきよに動物の国家全体と全人類のために単一の系統樹を描くにいたった。そして、その系統樹に全地球上で唯一特権的な場所として、あるひとつの地点から成長するよう命じたのである。ダーウインは、このような企てからは程遠かった。[Ibid.: 180]

種差には、異なる環境条件のもとで独立に生じた複数の生物集団にみられる原初的な種差と、遺伝や適応、性選択や生存闘争の影響によって分岐して生じる種差の、二つがある。「しかし、ヘッケルはこのうち第一の因果関係〔原初的な差異〕を完全に退け、第二の因果関係〔ダーウィンが示した要因による差異〕に頑固に固執したために、進化論に新たな奇跡と非自然的な要素を持ち込むことになった」とグループヴィチは批判する[*Ibid.*: 181]。以上に述べたことから、グループヴィチ自身の進化のイメージは、次のようなものであると考えることができる。まず、互いに異なる体制をもった数多くの集団が、空間的に隔たつて存在する。やがてそれらの集団が遭遇・接触し、集団間にさまざまな関係が生じる。それらの集団のなかには、一方でダーウィンの要因——適応、遺伝、性選択、生存闘争——によって変異し、分岐していくものも現われるが、しかし他方で「多数から少数へ」という「自然の政治」の力が働くので、全体としては徐々に統合が進んでいくことになるであろう。⁽²⁰⁾

闘争による社会過程

それでは、この進化の過程は、社会的領域ではどのような姿をとって進んでゆくのか。

所与の社会的領域には、すでに数多くの社会集団が存在している。それらの社会集団はそれぞれ異なる特徴を持っているが、すべての集団に共通している点がある。それは、集団の各成員が、自分の属している集団に対しては強い帰属意識（共属感 *sympada*）を持ち、他の集団に対しては強い攻撃的な指向を持つという点である。このような集団同士が遭遇すると、相互のあいだに作用・反作用が生じる。これが「社会的影響〔wpływ społeczny〕」であり、社会的な変化の起動力となる。

二つの異なる社会集団が遭遇した瞬間から、自らの目的のために他の集団を搾取しようとする要求が喚起さ

れる。これが、どこでもつねに社会過程への最初の衝動を与える。他の集団を搾取しようとするこの欲求は、各社会的要素の生来の、自然な、抑えがたい欲求であるため、二つの集団が出会うときに、このような欲求が喚起されないこと、社会過程が起動されないことはありえない。[*Ibid.*: 205—206]

二つの電流が出会うと火花が散るようになり、二つのグループが出会ったときには必ず闘争が起こる。そして、それが社会過程を起動させるのである。

もつとも原始的な社会集団は、原始的ホルド (*pierwotna horda*) である。二つ以上の原始的ホルドのいずれかが他の集団を征服し、融合すると、種族 (*szezep; Stamm*) が生まれる。この種族がさらに結合することによって国家が成立する。したがって種族は、原初的な国家の構成要素である[*Ibid.*: 224, 290]。

社会集団間の関係の本質は、戦争状態である。

時代をさかのぼればさかのぼるほど、個々の人間の群れのあいだの流血の闘争、軍事的遠征、相互の襲撃や掠奪が、より広く見られる。一部の哲学者や詩人が描いたような牧歌的な平和状態ではなく、終わることのない戦争が、あらゆる時代をつうじて人類の正常な状態であった。[*Ibid.*: 229]

つまり、種族対種族、部族対部族、民族対民族、国家対国家の絶え間のない闘争の情景が、人類史の正常な姿なのである。その目的はつねに同一であり、他者の搾取である。「異なる社会要素間の関係は搾取というこのひとつの定式によって表現することができる」[*Ibid.*: 230]。それは自然法則の表現であり、時代が経つにつれて消滅するというのではない。文明化された諸国民同士の戦争も、原始的な種族間の戦争と本質はまったく変わらな

文明化した諸国民は、「自由」、「人間性」、「国民性」、「統一」、「信仰」、「政治的均衡」などの仰々しい合言葉掲げて、洗練された外見のもとに遠征や戦争を行なうが、彼らもまた隣人やさらに遠くの諸国民を搾取しようと望んでいるのである。[*Ibid.* : 232]

国家もまた、ある種族が他の種族を征服することによって成立する。

事態はつねに同じである。他の種族が内部に侵入し、勝者となり、敗者を支配し、支配者は異なる階級、つまり支配階級となり、敗者を奴隷ないし隷属民として扱う。この隷属の形態は多様でありうるが、事態の本質はつねに同じである。[*Ibid.* : 245 - 246]

外交の舞台で生じていることも、軍事的征服の延長線上にある。

外交は、戦場で成し遂げられた事態を追認するにすぎない。外交は、勝利を告げる砲の響きが語ることを書き記すにすぎないのだ。新しいバルカンの諸国は、ベルリン会議で成立したのではない。それは、プレヴナの防壁の下で、血に洗われたサライエヴォで、成立したのである。[*Ibid.* : 249]

成立後の国家は、つねに多数者に対する少数者の支配の組織として存在する。この国家の本質は、国家の形態が奴隷制国家からより高度な国家に発展しても、変わることはない。「一方に支配し統治する者がおり、他方に支配され統治される者、つまり従属する者がいる。これが永遠に不変で不可避の国家の特徴であり、国家は、多数に対する少数支配の組織である。しかも、エスニックな多様性なくして国家を創造することはできない」。これは、最初に異なるエスニティーを持った集団を征服し、それを従属させることによって国家が成立するから

である。「支配者の被支配者に対する関係は、つねにある種族の他の種族に対する関係である」。したがって、国家はつねに本質的に多種族的である [Ibid. : 237 - 239]。

国内の種族間に支配・被支配関係が生じると、それぞれの種族に固有の文化のあいだにも闘争が生じる。言語も例外ではない。

異なるエスニックな要素からなる制度や国家が成立すると、その必然的な帰結として、一方の言語が死滅し、他方の、(ダーウインの表現を用いるならば)「生存闘争」に勝利した言語が、その支配を拡大する。 [Ibid. : 372]

しかし、国家の成立は、文明化の前提条件でもある。暴力的な征服の結果、少数者が支配し、多数者が支配される体制が成立すると、支配する側と支配される側のあいだで労働の分割が行なわれる。それによって少数者である支配者は肉体労働から解放され、高度な文化を築く余裕が生まれる。「文化と文明は、強制的な労働の分割したがって原初における征服、侵略、隷属化なしには決して発展しなかつたであろう」とグンプロヴィチは主張する⁽²¹⁾ [Ibid. : 260]。

しかし、文明化しても、人間そのものの本質が高貴なものになることはない。

今日なお、文明化された人間の精神のなかには、幾世紀も前に「未開人」の精神のなかに存在したのと同じ力が生きている。教養あるパリジャンの精神には、未開のホットントットの精神と同じ力が宿っているのである。「よそ者」に対するとき、今日でも「道徳」が、幾世紀も前と同様に「支配をめぐる闘争」を命じる。

この同じ道徳的理念が「対独復讐」と叫ぶフランス人を活気づけ、ポーア人から牛を盗むホットントットを活気づけるのである。 [Ibid. : 400]

社会の分化と種の形成のアナロジ―

国家の成立は、社会身分の形成の前提でもある。国家を構成する基本的な身分は、原初の征服の結果生まれる支配身分と非支配身分であるが、さらに商人が訪れたり——これもまた異なる社会集団との遭遇とみなすことができる——、経済的分業にともなう特定の集団が分化することによって、さまざまな職業に基づく身分が形成される。グンプロヴィチは、この身分形成の問題を、ダーウインの種の成立の理論と重ね合わせて論じている。

「異なる種族の要素が出会うことによる身分の成立と、社会的諸要素の分化による身分の成立という二通りのあり方は、遺伝と適応による種の相違の成立を想起させる」[*Ibid.*: 284]。ここでいう「遺伝による種の差異」とは、ある種が、生来的に異なる体制を持つていることを意味する。これに対して、「適応による種の差異」とは、ある種が、外的な諸条件への適応の結果、異なる体制を持つ種へと変異したために生じた差異を指す。「自然的体制は、二通りの仕方で成立する。原生的な (*pierwotnie*) 成立の仕方〔＝遺伝〕と、二次的な、つまり進化による (*drugorzędnie, droga ewolucyj*) 成立の仕方〔＝適応〕である」[*Ibid.*: 286]。換言すれば、遺伝的に最初から存在する差異が原生的な種差、最初は同じだったものが適応の過程で枝分かれして生じた差異が二次的な進化による種差、ということになるであろう。

グンプロヴィチは、適応による種差の形成は、ダーウインの理論においては仮説にすぎないと主張する。

ダーウインはこう言う。遺伝によって説明しえないものは、外的な諸条件への生物の適応から生じたに違いない。そして、この適応へと生物を駆り立てるのが、生存闘争である、と。〔……〕ダーウインは、相当数の詳細な事例において、生物がいかに外的な諸条件に適応するか、そして自らの遺伝的なタイプを変化させ

るかを示している。さらにダーウインは、適応によって獲得された変化が遺伝的なものとなりうることを証明しようとして努力している。そのさい、先入観や興奮なしに公平にダーウインの推論を読む者は、次のことを認めざるをえない。すなわち、一方の遺伝性は明白な事実であり、証明された真実である。他方、これに対して、適応は、さらには適応によつて獲得された変異の遺伝的定着は、要領のよい仮説である。[*Ibid.* : 285]

適応による種の形成は仮説にすぎないのだから、それだけで種の成立を考えるべきではない。進化の過程がはじまる以前に原初的に存在する種差も認めなければならぬ。「百歩譲つても、自然のなかで、自生性(*samorodztwo*)と進化性(*ewolucyjność*) がともに重要な役割を演じていることは否定しえない」[*Ibid.* : 286]。

身分もまた、生物種の原生的な種差と進化的な種差に対応する二通りの過程をへて形成される。つまり、最初から異なる社会集団がそれぞれ異なる身分を形成する場合(一次的・原生的な方式)と、同じひとつの社会集団がさまざまな理由から分化して異なる身分が成立する場合(二次的・進化的な方式)である。ただし、身分形成の方式の違いは、形成された身分集団の本質を左右するものではない。「社会集団がどのように成立するか、原生的に成立するか、進化的に成立するかは、個々の社会集団の性格や本質には影響を及ぼさない」。どのような経緯で成立しようと、他の社会集団を支配し搾取しようとする欲求を持つ点においては、いかなる社会集団も本質的に変わらないからである[*Ibid.* : 288]。

人類史に登場する社会集団には、ホルド、種族、人民(*lud*)、国民(*naród*)、社会(*społeczństwo*)などの種類がある。このうち最初の四集団——ホルド、種族、人民、国民——は、この順序で発展していくと考えられている。ここでグンプロヴィチのいう「人民(*lud*)」とは、国家の住民全体、共通の統治のもとに服する社会全体

を指す。したがって、人民は政治的現象である。これに対して「国民 (narod)」とは、過去に共通の歴史を通じて獲得された、ある共通の社会心理的特徴 (「民族性」narodovosť) を有する人びとの全体を指す。したがって、国民は文化的な絆によって結ばれた社会集団である。このような結合が生まれるにあたっては、同一の国家のなかで共通の経験を積むことが前提となる。その意味で、国民は人民よりも高度な発展段階を示している [Ibid.: 289 - 290, 295, 296]。

グンプロヴィチの「社会」の概念は、やや複雑である。社会には二つの用法がある。ひとつは、国家の内部のさまざまな住民集団の総体を指す場合である。この場合には、社会と国家の外延が一致することになる。いまひとつの用法は、国家の内部で存在するさまざまな個別の社会集団ひとつひとつを「社会」と呼ぶ場合である。この場合には、一つの国家のなかに複数の社会が存在することになる。さらに、社会が国家の境界を越えて存在するケースもないわけではない [Ibid.: 300 - 301]。

さらに、「社会」の第二の用法と部分的に重なりあう概念として、「社会圏 (Gesellschaftskreis; koto spoleczne)」という概念も登場する。これは、かなり高度に発展した国家の内部に複数存在する社会集団 (たとえば労働者階級、資本家など) を指す。各社会圏は、自己の利害だけを考えてエゴイスティックに行動し、他の社会圏と闘争する。ただし、すでに文明化が進んだ段階なので、露骨な暴力の行使は抑制される傾向がある。低い発展段階にある原始的ホルドや種族が互いに敵を殺戮しながら武力闘争を展開するのに対し、社会圏同士の戦いは、流血や殺戮を避け、合法的な装いのもとに繰り広げられるのである。たとえば、近代国家における労働者階級と資本家との闘争は、暴力的革命が起こらないかぎり、このような合法的な形態をとる。「とはいえ、この社会圏同士の闘争も、完全に「人種的」闘争 (walka rasowa) の特徴を備えていない」 [Ibid.: 313 - 314]。

グンプロヴィチの「人種」観

この最後の引用が示すように、グンプロヴィチの「人種」概念の用法はかなり特殊である。彼の社会理論において、人種 (Race) は、社会集団の原初的な構成要素であり、社会闘争の基本的な単位である。ただし、彼の「人種」概念は、狭い意味での生物学的な人種論の枠には収まらない点に注意する必要がある。グンプロヴィチは、人類史の出発点において形質人類学的にみても純粋な特徴をもった多様な人種が存在した可能性を否定はしないが、これは適及的に再構成された仮説であり、歴史過程においては、社会集団同士の融合が進むので、生物学的に純粋な人種は存在しないと主張する [Ibid.: 215-216]。

グンプロヴィチは、形質人類学的な（したがって生物学的な）人間の特徴は、歴史的・文化的な要因によって変化しうると考える。『人種闘争』のなかで、彼は次のように述べている。

今日では、人種は、決してたんなる狭義における人類学的概念ではありえない。そうではなくて、それは歴史的概念でもある。それは、たんなる生理学的な、あるいは生物学的な自然過程の所産ではなく、歴史過程——それはたしかにもうひとつの自然過程ではあるのだが——の所産である。人種は、今日では、歴史の経過のなかで社会発展をつうじて成立する統一体である。しかもそれは、われわれが見るように、その出発点を精神的な諸要因（言語、宗教、慣習、法律、文化など）のなかに見いだし、そこからつとも強力な身体的要因へ、それらを結びつける真の結合材である血の一体性へと、到達するような統一体なのである。 [Günplowicz 1909: 195]

これは、文化的・社会的影響によって身体的特徴が変化しうる、という主張にほかならない。したがって、グンプロヴィチのいう「血の一体性」もまた、特定の遺伝的特徴がいかなる変化もこうむらずに固定的に社会集団

内で継承されていくということではなく、ある社会集団の内部で、文化的・社会的要因と身体的構造との絶え間のない相互作用の結果、共通の形質が絶えず再生産されていく傾向として、動態的に把握するべきであろう。

グンプロヴィチの社会発展の図式によれば、社会集団は、血の紐帯によって結ばれた原始的ホルドから種族の国家的結合へ、さらには文化的絆によって一体化した国民へと進化していく。それにもなつて、社会的結合の規模はより大きくなり、結合の性格はより多様で複合的なものとなる。しかし、社会集団同士の統合が進んでも、それによって闘争の原因となる差異が消滅するわけではない。

われわれは、同じひとつの家族のなかにさえ、きわめて大きな人種的な差異を見いだす。これは、ダーウィンの理論や考え方による選択や適応によって生じたのではなく、同一の地域への相異なる人種の浸透の結果であり、さらにその後の混合の結果である。[Gumplowicz 1887: 154]

つまり、多様な人種が互いに混ざりあつて社会を——そのもつとも小さな単位としては家族を——構成しても、差異自体は存在しつづけるのである。

種族の数は、時代を経るにつれて減少する。

それは、一部は融合の結果であり、一部は種族の「死滅」の結果である。世界の新たに発見された地域でも、われわれは互いに死ぬほど憎みあい、生死を賭けて血みどろの争いや戦いを繰り返している無数の種族、群れ、ホルドを見いだす。[Ibid.: 168 - 169]

こうして無数の種族が死滅し、あるいは融合した結果として統合が進むにつれて、社会闘争の場も、より高い次元に拡大していく。興味深いことに、グンプロヴィチは、ヨーロッパ共同体が生まれる可能性を予見していた。

原始的ホルドの原初的な征服からはじまり、国家の組織をへて、国民と民族性の創出に至ったこの社会発展は、そこで止まるわけではない。なぜならば、この発展を支えてきた自然の諸力は死滅することはないからである。〔……〕ヨーロッパ諸国の体系の範囲内で、ヨーロッパの国際法がそのうえに築かれたような同盟や条約を繰り返し結んでいくことによって、いつの日か、世界の他の地域の人びとに対抗して、ヨーロッパ人のあいだである種の共同性と連帯に到達することができないとは言いきれない。[*Ibid.*: 341-342]

ここでグンプロヴィチが想定しているヨーロッパ共同体は、あくまで「世界の他の地域の人びとに対抗する」ための組織である。これは、社会闘争の場が、ヨーロッパ諸国間から、ヨーロッパ対他の地域という一段高い次元に拡大することを意味する。統合の進展は、闘争の終焉をもたらすものではないのである。

人類は進歩するか

それでは、不断の闘争をつうじて人類は進歩してきたといえるのか。

歴史の結果は、全体の進歩でも、衰退でも、後退でもない。それはむしろ、つねに同じ自然過程である。この過程は、異なる時代、異なる場所で、いくらか異なる形式をとりつつも、その内容はつねに同じである。

[*Ibid.*: 464]

人類史の変わることはない。「内容」とは、「無思慮な群衆がつねに社会制度の土台となる多数を成し、彼らのうえに彼らを「搾取する」少数者がいて、多数者を従属させている」状態を指す。まれに才能に恵まれた個人が

めざましい発見や発明をしても、それによって社会の本質が変わることはない。

あらゆる発見にもかわかわらず人類はいつまでたっても同じままである。丸木舟で航海しようが、帆船で航海しようが、蒸気船で航海しようが、同じである。電報であれ、電話であれ、彼らの本性や精神的性向を変へることはない。互いを搾取するという、つねに同じ目的を達成するために、今では新しい手段を用いている、というにすぎない。戦争の時、棍棒と剣で殺そうが、元込め式の銃で殺そうが、ダイナマイトと魚雷で殺そうが、根本的な違いはない。[ibid. : 464 - 465]

つまり、人類は進歩しないというのがグンプロヴィチの結論であった。悲観的ともいえるが、他方でこのような観点にたつと、未開人を愚かで劣った存在とみなす見方も成り立たなくなる。

もしわれわれにとってアフリカやアメリカの未開部族の迷信や偏見が、ヨーロッパのどこかの国民の迷信や偏見よりも滑稽で愚かにみえるとしたら、それはわれわれがヨーロッパ諸国民のいろいろな愚かさには慣れ親しんでいる一方で、アフリカの「未開人」の愚かさは風変わりなものに思うだけのことにはすぎない。しかし、そこにあるものはどこでも同じなのである。[……] 要するにわれわれは、「未開人」の愚かさと同様にヨーロッパ諸国民の愚かさを異なる尺度で測っているが、その内容は同一であり、ただその形式が異なるにすぎない。[ibid. : 466 - 467]

『社会学体系』は、このように未開と文明の違いを相対化する視点を提示して終わる。しかし、それは、ポジテイヴィズムが前提としていた社会進化への楽観的な展望を放棄するという代償をとってもいたのである。

五 「ポーランドの土壌」から生まれたもの

グンプロヴィチの社会理論の最大の特徴は、複数の社会集団間で不断に闘争が展開し、それが社会発展を引き起こすという考え方である。闘争という現象をつうじて社会をみる視点は、生存闘争をとおして生物の進化を考えるダーウィンの発想と共通するともいえる。しかし、『種の起原』における記述は生物の個体間の闘争を重視しており「ダーウィーン 一九九〇、上、八五―一〇九頁」、集団間の闘争を中心とするグンプロヴィチの闘争のイメージとは、かならずしも一致しない。また、グンプロヴィチは、ダーウィンの進化論の根底にある個体群思考 (Population thinking) の意義を十分に認識していたとはいいがたい。個体が集団に完全に従属するグンプロヴィチの社会理論においては、集団を構成する個体の変異や個体間の偏差がその集団に及ぼす影響を統計的な次元で把握する発想は、まったくといってよいほど欠如している。

ダーウィンの影響という面では、むしろ人類の起源や身分の形成について論じるさいに、種の分岐論への参照がみられる点が注目される。もっとも、ここでもグンプロヴィチの議論はかならずしもダーウィーン自身の見解に忠実ではなく、独自の読み込みや批判的な論評が目につく。それでもあえてダーウィンの理論との照合に固執する点に、この時期、進化論が持っていた理論的参照枠としての拘束力をみてとることもできよう。

グラーツに移住後のグンプロヴィチは、人類の進歩 (退化) を明確に否定した。これは、彼の社会学体系においては、自然法則 (社会法則を含む) はつねに不変であるという考え方の必然的な帰結であった。この点で、グンプロヴィチを「社会進化論者」とみなすことには、一定の留保が必要である。彼の社会発展論においては、社

会的結合の形式は進化するが、社会過程の内容（集団間の搾取と闘争）は本質的に変わらない。社会主義に対する彼の批判も、基本的にはこのような立場に由来する。また、革命によって労働者大衆による支配体制を確立することは、国家の本質——少数者による多数者に対する支配——に反するがゆえに、実現不可能とみなされる [Gumplowicz 1964: 496-505]。

グンプロヴィチは、進歩を否定する自らの社会理論と、独立を奪われたポーランドの状況との関係を、どのように考えていたのであろうか。この点については、『社会学体系』の序文に興味深い記述がある。

この著作で展開されている見解が私のなかで芽生えたのは、もう二八年も前のことである。ヤギエウオ大 学〔クラクフ大学〕の教室で、ローマ法学者デメリウスの講義を聴いていたとき、私は、ローマ社会の構成や 成りたちを、われわれの社会のそれと心のなかで比較してみた。そのとき以来、私は、あるひとつの民族が さまざまな社会的構成要素から成り立っていることは偶然ではなく、一般的な社会法則の結果ではないかと いう考えにとりつかれるようになった。私は、いつ、どこにいても、この考えが気になって、実生活や歴史 のなかにその徴候を追い求めた。〔……〕著書『ユダヤ人にかんするポーランドの立法』（クラクフ、一八六 七年刊）のなかで、私は、ポーランド社会の多様な構成要素の相互関係に観察を限定し、それぞれの構成要 素の異なる立場を、それが立法に反映される限りにおいて、考察した。

その後、私は理論の分野からジャーナリズムの分野に移り、数年間、社会闘争の熱い戦いを間近に見つめ る機会を持った。これらの激しい運動と潮流を、私はつねに自分の理論に照らしてみた。 [Gumplowicz 1887:

1-2]

グンプロヴィチはここで、自らの社会学の着想がヤギエウオ大学での学生時代に芽生え、ユダヤ人問題の歴史

的考察をへて、雑誌『故国』の編集活動をつうじて実地に検証されていったと述べ、クラクフ時代からの思索の一貫性を強調している。

グンプロヴィチの社会理論が、複数の異質な社会集団が重層的な支配・被支配関係のもとにおかれていた分割期のガリチア社会の観察にもとづいていることは確かであろう。また、彼の社会闘争のイメージが、自らジャーナリストとして民族闘争に主体的に参加する経験のなから生み出されてきたことも否定できない。グンプロヴィチが編集長をつとめた雑誌『故国』は、第一次ポーランド分割一〇〇周年（一八七二年）にあたって、「生存闘争（Walka o byt）」というタイトルのもとに分割の原因と民族運動の展望を論じた連載を企画している[Kołosowska-Sabatowska 1978: 128]。このときすでに、独立を喪失したポーランド民族の境遇は、進化論的な語彙を用いて把握され、記述されていたのである。しかし他方で、わたしたちは、ユダヤ人問題にかんする初期の諸論考と、生地クラクフの保守的な学術・言論界から追われたのちの社会学理論とを比較するとき、その間に失われたもの——教育と啓蒙による社会対立の克服と国民の形成への展望——があったことにも気づく。グンプロヴィチの社会闘争論は、啓蒙による社会の進歩への希望を断念しつつ、対立する諸民族の利害が複雑に入り組んだ東中欧社会の現実を直視するという姿勢の選択のうえに築かれているのである。

冒頭でルカーチの評価にふれて述べたように、グンプロヴィチの名前は『人種闘争』という書名としばしば結びつけられて語られ、社会進化論のドイツ的変種の系譜のなかに位置づけられてきた。このことは、ポーランド系ユダヤ人の文化的固有性を維持しながら民族的敵対を乗り越える道を模索しようとしたこの社会学者にとつて、不幸なことであったといえよう。すでにみたように、彼の「人種」概念は、生物学的概念というよりも歴史的・文化的な要因に強く規定された概念であり、二〇世紀の全体主義国家の人種論から遡及的にみるよりも、一九世紀後半の東中欧の多民族社会の複雑な現実のなから生まれた社会学論として読み解くほうが、その理論的営為

の意味はより鮮明に浮かび上がってくるのである。⁽²³⁾

グンプロヴィチは、『人種闘争』や『社会学概説』で示した見解がヨーロッパ諸国で広く認められるに至ったことを喜び、次のように『社会学体系』の序文を結んでいる。

しかし、それは、私にとって、自分の負っているものを故国に返し、ポーランドの土壤で育った理論を祖国のことはばで発表するときが来た、ということでもある。このことを実行に移すことで、私は自分の市民的義務を果たそうと思う。[Ibid. : 3]

ここで、グンプロヴィチが自らの社会学理論を「ポーランドの土壤で育った理論」と呼んでいることは示唆的である。彼は、先行する論者の理論や着想を分割期のポーランド社会の現実に照らして取捨選択し、変形し、敷衍して、自らの社会学体系のなかに組み込んだ。ダーウインのテキストもまた、諸民族の利害が錯綜し衝突する東欧社会のイメージと重ね合わされ、本来の文脈とは異なる文脈に置き換えられたうえで再解釈され、利用されたのである。闘争を動因とする社会発展論や、種の分岐と身分形成のアナロジは、このような生物学的進化論の読み替えと領有 (appropriation) の一例である。グンプロヴィチの社会闘争論は、その意味では、「ポーランドの土壤」に移植されたダーウインの進化論の創造的「誤読」の果実——ただし、あまりに苦い果実——であったともいえるであろう。

注

(一) Torrance [1976: 186-191]を参照。

- (2) グンプロヴィチの書誌としては、完全なものではないが、ジェプロフスキ[Zebrowski 1926: 18-38]、およびゲッラ[Gella 1966: 241-244]を参照。グンプロヴィチの著作の日本語訳としては、上記二書誌に『社会学概論』*Grundriss der Soziologie* (邦訳(東京、一九〇一年刊)が挙げられている[Zebrowski 1926: 19; Gella 1966: 242]が、筆者は所在を確認できなかった。他方、筆者が披見しえた『社会学と政治』(新見吉治・柴山鶯雄訳、明治書院、一九〇二年刊。L. Gumpowicz, *Soziologie und Politik*, Leipzig, 1892の日本語訳)は、ジェプロフスキとゲッラの書誌では欠落している。なお、日本にいち早くグンプロヴィチの理論を紹介した加藤弘之の著書『強者の権力の競争』(一八九三年刊)のドイツ語版(Hiryuki Kató, *Der Kampf ums Recht des Stärkeren und seine Entwicklung*, Berlin 1894)にグンプロヴィチは批判的な書評を寄せており[Gumpowicz 1895]、加藤はこれに反駁している[加藤 一九九〇、四五三―四五七頁]。また、大山郁夫は『政治の社会的基礎』(一九二三年刊)のなかで、「科学としての政治学」に到達するにあたって「誰れによりも、殊に、オーストリアの社会学者でもあり、国法学者でもあった、故ルドヴィヒ・グンプローヴィッツに最も多く負うてゐること」を認めている[大山 一九八七、三頁]。グンプロヴィチの社会学論・国家理論を比較的詳細に紹介した邦語文献としては他に、今中[一九二七、一九二八 a、一九二八 b]、五十嵐[一九三八]を参照。
- (3) ポーランドの社会学者が著した社会学史には、グンプロヴィチの社会学論についてルカーチとは異なる角度からの言及がみられる。イエジ・シヤツキは、グンプロヴィチをデュルケームと並ぶ社会学主義(sociologism)の提唱者として位置づけている[Šacki 1976: 280-286]。他方、ヤン・シチェパンスキは自然主義的社会学(sociologia naturalistyczna)を扱った章のなかでグンプロヴィチに論及しているが、グンプロヴィチの社会闘争論が自然界における生存闘争の概念をそのまま社会に適用したものではない点にも注意を促している[Šczepański 1969: 180-187]。
- (4) ロシア、オーストリア、プロイセンによる第三次分割(一七九五年)によって領土を失って以降、一九一八年にポーランド共和国が成立するまで、主権国家としてのポーランドは存在しなかった。
- (5) ポジティヴィズムの全般の特徴については、さしあたり川名[一九八七]、Blewas [1984]、Markiewicz [1980]、Rudziński [1968]、Tonkowski [1993]を参照。
- (6) 一八八〇年代以降のポジティヴィズムの変質については、Porter [2000: 75 ff.]を参照。
- (7) ワルシャワ大学は一八一六年に創立されたが、十一月蜂起(一八三〇―一八三一年)に対する報復措置として閉鎖された。一八

六二年にウルシヤワ中央学校として再開され、一八六九年、ロシア化政策の一環として帝国大学のひとつに改組された。一八五五年以降、非ロシア化され、独立回復後、ポーランドの中心的な大学のひとつとなる。

(8) マイツェルによる部分訳(一)は分冊形式で四巻まで刊行された。全訳本は、訳者としてデイクステインのみを挙げた一八八四年版(二)と、デイクステイン、ヌスbaum両名を併記した一八八四―八五年版(三)とがあるが、内容は同一である。

(一) Karol Darwin, *O powstaniu gatunków drogi naturalnego doboru, czyli o utrzymywaniu się doskonalszych ras istot organicznych w walce o byt*, przekład dokonany przez Wacława Mayzla, Warszawa 1873.

(二) Karol Darwin, *O powstaniu gatunków drogi naturalnego doboru czyli o utrzymywaniu się doskonalszych ras w walce o byt*, przełożył Szymon Dickstein, Warszawa 1884.

(三) Karol Darwin, *O powstaniu gatunków drogi naturalnego doboru czyli o utrzymywaniu się doskonalszych ras w walce o byt*, przełożył Szymon Dickstein i Józef Nusbaum, Warszawa 1884―1885.

全訳を行なったデイクステインとヌスbaumは、ともにウルシヤワ中央学校時代のデイクホフスキの教え子である[Brzek 1982: 20]。デイクホフスキとヌスbaumの進化論理解にかんしては、以下の文献を参照[Skarga 1983: 31―36; Zarys filozofii polskiej 1986: 189―192]。

(9) 原著の第一部に相当する『人間の由来について』は、Karol Darwin, *O pochodzeniu człowieka*, przetłumaczył Ludwik Masłowski, Kraków 1874, 第二部に相当する『性選択』(二巻)は、Karol Darwin, *Dobór płciowy*, T. I―II, przetłumaczył Ludwik Masłowski, Lwów 1875―1876.

(10) Karol Darwin, *Wyraszczenie i zwierzęta, przekład dokonany przez Komrada Dobrskiego*, Warszawa 1873.

(11) 翻訳は、これもユゼフ・ヌスbaumによる。『ボーグル号航海記』は、Karol Darwin, *Podróż naturalisty. Dziennik spostrzeżeń dot. Historji naturalnej i geologii okolic zwiedzonych podczas podróży naokoło świata na okręcie J. K. M. "Beagle" pod dow. Fitz Roy*, przełożył Józef Nusbaum, Warszawa 1887. 『飼育動物および栽培植物の変異』は、Karol Darwin, *Zmienność zwierząt i roślin w stanie kultury*, T. I―II, przetłumaczył Józef Nusbaum, Warszawa 1888―1889. 自伝・書簡集は、雑誌『ブミンエグロント・テイロドニョウイ(週刊展覧)』『Przegląd Tygodniowy』の予約購読者に無料配布される付録として第六分冊まで刊行されたが、未完に終わった。『Życie i listy Karola Darwina, oraz autobiografia autora wydana przez jego syna Franciszka Darwina, z. 1―6,

- Humaczyński Józef Nusbaum, Warszawa 1889—1890.
- (12) Karol Darwin, *Dziela wybrane*, T. I—VIII, Warszawa 1959—1960. の著作集刊行の背景については、小山 [二〇〇二]、一八五—一八六頁」を参照。
- (13) パウリツキの進化論批判については、*Filozofia i myśli społeczna* [1980: Cz. II, 262—275]を参照。
- (14) シフィエントホフスキの「進歩」理解については、川名 [一九八七、七五—八五頁] および Rudzki [1968: 29—118]を参照。
- (15) ルドヴィク・グンプロヴィチの生涯については Bienkowski [1960—1961]、Gella [1966: 46—62]、Żebrowski [1926: 5—17]、グンプロヴィチ家の系図については Bahaban [1991: 663]を参照。
- (16) アブラハム・グンプロヴィチの生涯については Bak [1960—1961]を参照。
- (17) 『歴史的・知的発展における最終意思』*Wola ostatnia w rozwoju dziejowym i umietycznym* (一八六四年刊)、ならびに「ユダヤ人にかんするポーランドの立法」*Prawodawstwo polskie względem Żydów* (一八六七年刊) の二篇。
- (18) グンプロヴィチが発行人兼編集者をつとめたのは形式的には一八七三年四月までであるが、実質的には翌七四年六月末までこの雑誌の編集にかかわっている [Zarembka-Piekara 1970: 20—21]。
- (19) 『人種闘争』はフランス語 (一八九三年) とスペイン語 (一八九四年)、『社会学概論』はフランス語 (一八九六年)、ロシア語 (一八九九年)、英語 (一八九九年、一八九九年、一九六三年)、『社会学と政治』はロシア語 (一八九五年)、フランス語 (一八九九年)、日本語 (一九〇二年)、『社会学的国家理念』はイタリア語 (一九〇四年)、『社会学的エッセイ』はフランス語 (一九〇〇年)、『社会学要論』はポーランド語 (一九一一年) にそれぞれ翻訳されている。
- (20) ただし、グンプロヴィチは、人種の多民族起源それ自体は、社会学的な理解における第一的な事実であって、これを実践することはできないとも述べている。「原始的な無数の人間群は、社会学において、地質学者にとって最初の星雲がはたすのと同様の出発点としての役割を果たさなければならない」。このような仮説は学問には必要である。「社会学は、社会学にとって与えられた起点、すなわち地上に無数の原始的ホルドが存在する瞬間から以後の社会的発展を研究することで満足しなければならぬ。このわれわれにとつての原初的狀態がどのような仕方で成立したかは、社会学の領分の外にある」。社会学はこの起点から出発するのであり、起点の由来そのものを問うことは社会学の領域を踏み越えることになるのである [Gunn-plowicz 1887: 173, 207]。

なお、グンプロヴィチは、晩年に、人類の多民族起源説を撤回せざるをえなくなる。一九〇三年、アメリカの社会学者レスター・F・ウォードがグラーツにグンプロヴィチを訪れたさい、人類の起源をめぐって議論になった。このとき、単一起源説をとるウォードによってグンプロヴィチは論破された。翌年、グンプロヴィチは、ウォードとの議論の経緯を説明し、多起源説の撤回を表明する文章を『ツァイト』誌に発表した[Gumpłowicz 1904]。この文章は、英訳されて『アメリカ社会学雑誌』にも掲載されている[Gumpłowicz 1905]。グンプロヴィチとウォードとの関係については、Gumpłowicz [1933]、Gella [1966]を参照。

(21) 法律は、暴力的な征服によって生じた不平等な国内の秩序を固定的に維持するために制定される。しかし、いったん法律が成立すると、それは支配されている側にとっても恩恵となる可能性がある。国内の労働の分割によって文明が発展していけば、隷属する側も副次的にその利益を享受する可能性があるからである[Gumpłowicz 1887: 260, 411-413]。

(22) グンプロヴィチの用語法では、ポーランド語の“*jud*”はドイツ語の“*Volk*”、“*narod*”はドイツ語の“*Nation*”に対応する。グンプロヴィチの「人民」・「国民」概念については、Goetze [1969: 40-43]をも参照。

(23) 逆に、以下に引用するようなテキストが——グンプロヴィチの著書以上にあからさまに進化論的な発想に依拠しながら人間の優劣と闘争について語っているにもかかわらず——社会科学の古典として、現在に至るまで読み継がれているのは何故だろうか。

わたくしがお話しようと思っているのは、さしあたってはつきのこと、すなわち、異なった民族のあいだに存在する、肉体的および心理的な人種の相違というものが、経済上の生存競争において果たしている役割を、ひとつの実例に即して具体的に示すことであります。そして、それを手掛かりとして、経済政策を考察しようとするばあいに、民族的基盤にたっている国家——わが国の場合がその例です——が占めるところの地位というものを、すこしく考えてみたいと思います。

[……]

[……] なぜポーランド人の農民が地歩を占めるのでしょうか。経済的な知性とか資本力とかの点で、ポーランド人の農民のほうがすぐれているからでしょうか。けっしてそうではありません。むしろ、経済的な知性の点でも資本の点でも、すぐれていないことこそが、彼らの勝利の原因なのです。[……] ポーランド人の小農が進出するのは、かれらがいわば草を

食って生きているからなのです。かれらの生活慣習が、物質面でも精神面でも、低いにもかかわらずではなくして、低いからこそ、進出してくるというわけです。したがって、われわれの眼の前でおこなわれているのは、一種の淘汰過程であるようにみえます。〔……〕

「平和」の仮象のもとにおいても、諸民族の経済闘争は容赦なくおこなわれています。〔……〕経済的な生存闘争においても、平和はけつして存在しません。〔……〕人間と人間との苛酷な闘いを経ることなしに、なにか他の方法によって、この世の権力支配圏をわがものにできるだろうなどは、とうてい信じられないのです。〔……〕

われわれが子孫に餓けとして贈らねばならないのは、平和や人間の幸福ではなくして、われわれの国民的な特質を護りぬき、いっそう発展させるための永遠の闘い、です。

〔ウエーバー二〇〇〇、九、二二—二二、二八—三〇、三三—三四頁（強調は原文）〕

ウエーバーは、この論考（『国民国家と経済政策』、原著は一八九五年刊）のなかで、オットー・アモンの著書（『人間における自然淘汰』、『社会秩序とその自然的基礎』）を「現に受けている以上の注意を受けるだけの値打ちがある」と評価しているが、ゲンプロヴィチは、アモンによる生物学的進化論の社会的領域への直接的適用には、批判的である。『社会学的エッセイ』に収められた論考「ダーウィニズムと社会学」〔Gumplovicz 1899: 19—42〕を参照。

参考文献

- Balaban, Majer 1991. *Historia Żydów w Krakowie i na Kazimierzu 1304—1868*, Tom II: 1656—1868. Kraków 1936, rpt. Kraków: Krajowa Agencja Wydawnicza.
- Barycz, Henryk 1963. *Wśród gawędziarzy, pamiętnikarzy i uczonych galicyjskich. Studia i sylwetki z życia umysłowego Galicji XIX w.*, Tom II. Kraków: Wydawnictwo Literackie.
- Baszkievicz, Jan 1950. *Ludwik Gumplovicz jako teoretyk państwa. Państwo i Prawo 2: 511—540.*

- Bak, Celina 1960 – 1961. Gumpłowicz (Gumpłowitzi) Abraham (1803 – 1876). *Polski słownik biograficzny* IX: 148 – 149.
- Benkowski, Wacław 1960 – 1961. Gumpłowicz Ludwik (1838 – 1909). *Polski słownik biograficzny* IX: 150 – 153.
- Blewas, Stanisław A. 1984. *Realism in Polish Politics. Warsaw Positivism and National Survival in Nineteenth Century Poland*. New Haven: Slavica Publishers.
- Brzęk, Gabriel 1982. Benedykt Dybowski i Józef Nusbaum-Hilarowicz jako pionierzy darwinowskiego ewolucjonizmu w Polsce. — *Przegląd Zoologiczny* 26 – 1: 19 – 35.
- Bizozowski, Stanisław 2000. *Pamiętnik*. Fragmentami listów autora i objaśnieniami uzupełnił Ośtar Ortwin. Wstęp opatrzył Andrzej Mancwel. Warszawa: Czytelnik.
- Dąbrowska, Maria 1982. *Noce i dnie*, T. I, wyd. XXIV. Warszawa: PW.
- ダーウイン^ˆ〔チャールズ・ロバート〕一九九〇『種の起原』(八杉龍一訳)上・下、岩波文庫。
- Filozofia i myśl społeczna w latach 1865 – 1895*. Część I – II, wybrały, opracowały, wstępem i przypisaniami opatrzyły Anna Hochfeldowa i Barbara Skarga. Warszawa: PWN.
- Gella, Aleksander 1966. *Ewolucjonizm a początki socjologii (Ludwik Gumpłowicz i Lester Frank Ward)*. Wrocław – Warszawa – Kraków: Zakład Narodowy im. Ossolińskich – Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.
- Goetze, Dieter 1969. *Die Staatstheorie von Ludwig Gumpłowicz*. [Bamberg: Schmachtl.
- Gumpłowicz, Ludwik 1867. *Prawoauństwo polskie względem Żydów*. Kraków: Księgarnia J. M. Himmelbaua.
- 1875. *Stanisława Augusta projekt reformy żydowska polskiego*. Kraków: Księgarnia Adolfa Dygasńskiego.
- 1887. *System socjologii*. Warszawa: Wydawnictwo Spółki Nakładowej.
- 1895. Rev.: Hiroaki Katō, *Der Kampf ums Recht des Stärkeren und seine Entwicklung*. Berlin 1894. *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 5: 767 – 768. (『哲学雑誌』に掲載された日本語訳は「加藤〔一九九〇〕四四九—四五〇頁」を参照)
- 1899. *Soziologische Essays*. Innsbruck: Verlag der Wagner'schen Univ.-Buchhandlung.
- 1904. Lester F. Ward. *Die Zeit* 516: 86 – 90.

- 1905. An austrian appreciation of Lester F. Ward. *The American Journal of Sociology* 10: 643—653.
- 1909. *Der Rassenkampf. Soziologische Untersuchungen*. Zweite, durchgesehene und mit Anhang, enthaltend die 1875 erschienenen Schrift "Rasse und Staat" verschiedene Auflage. Innsbruck: Verlag der Wagner'schen Univ.-Buchhandlung.
- 1933. *The Letters of Ludwig Gumplowicz to Lester F. Ward*. Ed. by Bernhard J. Stern. Leipzig: C. L. Hirschfeld Verlag.
- 1964. *Rechtsstaat und Socialismus*. Neudruck der Ausgabe 1881. Osnabrück: Otto Zeller.
- Hochfeldowa, Anna and Barbara Skarga 1980. Polska myśl filozoficzna w epoce pozytywizmu. W: *Filozofia i myśl społeczna w latach 1865—1895*, Część I, wybraty, opracowały, wstępem i przypisaniami opatrzyły Anna Hochfeldowa i Barbara Skarga. Warszawa: PWN, 9—100.
- Horowitz, Irving Louis 1963. Introduction—the sociology of Ludwig Gumplowicz: 1838—1909. In: Ludwig Gumplowicz. *Outlines of Sociology*, ed. with a preface, introduction and notes by Irving Louis Horowitz. New Brunswick, New Jersey: Transaction Books, 10—85.
- 五十嵐豊作 一九三八「グンブロヴィッチ」『廿世紀思想 第五卷 進化主義』河出書房、一〇九—一四一頁。
- 今中次磨 一九二七「グムプロキッツの科学方法論」『国家学会雑誌』四一卷八号、一一八一—一二二四頁。
- 一九二八 a 「グムプロキッツの政治発生論(一)」『国家学会雑誌』四二卷八号、一一八〇—一二二〇頁。
- 一九二八 b 「グムプロキッツの政治発生論(二・完)」『国家学会雑誌』四二卷九号、一二二九—一三六九頁。
- Karolczak, Kazimierz 1991. Ludność żydowska w Krakowie na przełomie XIX i XX wieku. W: *Życi w Małopolsce. Studia z dziejów osadnictwa i życia społecznego*. Praca zbiorowa pod redakcją Feliksa Kiryka. Przemysł: Południowo-Wschodni Instytut Naukowy w Przemyslu. 251—255.
- 加藤弘之一九九〇「拙著に対するグムプロキツ博士の批評(前に掲載したるもの)を読む」『加藤弘之文書』第三卷、同朋舎、四五三—四五七頁。
- 川名隆史 一九八七「A・シフイエントホフスキにおける近代化と進化論——ワルシャワ・ポジティヴィズムの社会理論」『一橋論叢』九七卷一号、六八—八五頁。
- Kostecki, Janusz 1986. Wybory lekturowe abonentów warszawskich wypożyczalni prywatnych na przełomie lat osiemdziesiątych i

- dziewięćdziesiątych XIX wieku. W: *Przełom antypozytywistyczny w polskiej świadomości kulturowej końca XIX wieku*. Pod redakcją Tadeusza Bujnickiego i Janusza Maciejewskiego. Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk – Łódź: Zakład Narodowy im. Ossolińskich. 183 – 214.
- 小山哲 二〇〇二「マルクシズムとカトリシズムのはなまじ——二〇世紀後半のポーランドにおける進化論と世界観」『進化論』受容の社会的・文化的文脈にかんする学際的・比較研究』(平成二二・二三年度科学研究費補助金 基盤研究B(2)) 研究成果報告書 研究代表者 阪上孝)、京都大学人文科学研究所、一七五—二〇一頁。
- Kozłowska-Sabatłowska 1978. *Ideologia pozytywizmu galicyjskiego 1864 – 1881*. Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk: Zakład Narodowy im. Ossolińskich.
- Leszek, Kuźnicki 1987. *Biologia ewolucyjna*. W: *Historia nauki polskiej*, Tom IV: 1863 – 1918, Część III. Redaktor tomu: Zofia Skubal-Tokarska. Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk – Łódź: Zakład Narodowy im. Ossolińskich. 323 – 339.
- ルカーチ、ジェルジ 一九六九『ルカーチ著作集 一三 理性の破壊(下)』(暉峻凌三・飯島宗享・生松敬三訳) 白水社。
- Markiewicz, Henryk 1980. *Pozytywizm*. Wyd. II. Warszawa: PWN.
- Maternicki, Jerzy 1980. *Historia w oczach socjologów*. Ludwik Gumplowicz i Ludwik Krzywicki. *Kwartalnik Historyczny* 87 – 1: 97 – 118.
- 大山郁夫 一九八七『大山郁夫著作集——大正デモクラシー期の政治・文化・社会——』第四卷 岩波書店。
- Porter, Brian 2000. *When Nationalism Began to Hate. Imaging Modern Politics in Nineteenth-Century Poland*. New York – Oxford: Oxford University Press.
- Rudziak, Jerzy 1968. *Aleksander Świętochowski i pozytywizm warszawski*. Warszawa: PWN.
- Skaręga, Barbara 1983. *Przyrodnozawstwo i filozofia*. W: *Problemy literatury polskiej okresu pozytywizmu*, Seria 2. Pod redakcją Edmunda Jankowskiego i Janiny Kulczyckiej-Saloni. Wrocław – Warszawa – Kraków – Gdańsk – Łódź: Zakład Narodowy im. Ossolińskich. 9 – 44.
- Szacki, Jerzy 1976. *History of Sociological Thought*. Westport: Greenwood Press.
- Szczepanski, Jan 1969. *Sociologia. Rozwój problematyki i metod*. Warszawa: PWN.

- Tomkowski, Jan 1993. *Mój pozytywizm*. Warszawa : Wydawnictwo IBL.
- Torrance, John 1976. The emergence of sociology in Austria, 1885 – 1935. *Archives europeennes de sociologie* 17 – 2 : 185 – 219.
- ウヘーヌ、トマス 二〇〇〇 『国民国家と経済政策』(田中正晴訳) 未来社。
- Zaleski, Antoni 1971. *Towarzystwo warszawskie. Listy do przyjaciółki przez Baronową XYZ*. Oprac. R.Kołodziejczyk. Warszawa : PIW.
- Zaremba-Piekara, Izabela 1970. Idee pozytywistyczne w "Kraju" Ludwika Gumplowicza. *Rocznik Historii Czasopiśmiennictwa Polskiego* 9 – 1 : 17 – 32.
- Zarys filozofii polskiej 1815 – 1918* 1986. Red. Andrzej Walicki. Warszawa : PWN.
- Žebrowski, Bernhard 1926. *Ludwig Gumplowicz. Eine Bio-Bibliographie*, Berlin : R. L. Prager.